

嘉永度江戸城西丸御殿大奥主要御殿 2 種類の平面と室内意匠の関係

小 粥 祐 子

1 はじめに

江戸時代の上級武家住宅は、江戸時代の封建秩序に則り、公式行事や儀式が執り行われる表向と、主人とその家族が日常生活を送る奥向から構成されていた。

武家住宅は主人に対する来訪者が多く、来訪者に対する主人の格式を示威する手段として、またそこに住む主人家族及び家臣・使用人の身分を示す手段として、格差を示す空間秩序が必要であった。その手段の一つに、室内意匠があった。

書院造に基づいて造られた上級武家住宅の場合、座敷飾（床・違棚・付書院・帳台構）の構成、壁面（張付壁と建具）・天井の仕様、柱・長押等の寸法や材質、壁面・天井や建具に用いられる障壁画の画題・唐紙の種類、欄間の様式、飭金物の意匠によって、空間が格付けされていた。

上級武家住宅の空間を格付けしていた要素について、空間の格付けという観点から考察した研究は、座敷飾、障壁画、彫物欄間、飭金物に関しては先行研究があるが、唐紙についてはこれまでに明らかにした拙稿だけである。

唐紙とは一般に文様を木版で色刷りした紙を言い、数寄屋建築に多く用いられたことは周知のことであるが、上級武家住宅の壁面や天井に用いられたことは、ほとんど知られていない。具体的には、上級武家住宅に唐紙が用いられる場合には私的な部屋に使われることが多いと指摘されただけで、用例を検討した論考は拙稿以外なかった。

筆者はこれまで、江戸時代において上級武家住宅の規範となったと考えられる将軍の居城である江戸城本丸御殿を取り上げ、将軍一家にとっての私的空間である大奥における唐紙の用例を検討してきた。

その結果、幕末期の大奥（弘化元年及び万延2年竣工）では、壁面（張付壁と建具）・天井の意匠に、障壁画と唐紙が併用されていることが明らかになった。また、障壁画と唐紙の使い分け方は、部屋の格式が高い順に、壁面・天井ともに障壁画を用いる〔絵/絵（格天井）〕型、壁面に障壁画を使い天井に唐紙を用いる〔絵/唐紙（鏡天井）〕型、壁面・天井の全てに唐紙を用いる〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕型の3形式に分類できることを明らかにした¹。

江戸城には、本丸御殿、西丸御殿、二の丸御殿などが建っていた。本丸御殿は、幕府の政庁であり将軍家族の住居であった。これに対し、本稿で研究対象とする西丸御殿は、将軍の世子や将軍を退いた大御所の住居であった。本丸御殿焼失時には、一時的に本丸御殿の仮御殿として用いられたこともあった²。そのため、西丸御殿は、本丸御殿を簡略化した構成をとっていたとされている³。

本稿は、嘉永5年（1852）に竣工した嘉永度西丸御殿大奥の主要御殿を対象とし、嘉永度西丸御殿大奥における壁面・建具・天井に用いられた障壁画と唐紙の使い分け方を明らかにすることを目的としている。研究にあたっては、2種ある嘉永度西丸御殿大奥とされる平面図の平面の異同と、それらの平面図にみられる障壁画と唐紙の使い分け方の関係についても明らかにする。

2 嘉永度西丸御殿について

嘉永度西丸御殿は、天保10（1839）年に竣工した天保度西丸御殿が、嘉永5（1852）年に焼失したことにより再建された。西丸御殿の再建は、嘉永5年（1852）年7月5日、中奥向の休息の間・御座之間の地形から始まり、奥向（中奥）は11月27日、表向は11月21日、大奥は11月27日に竣工をしめす

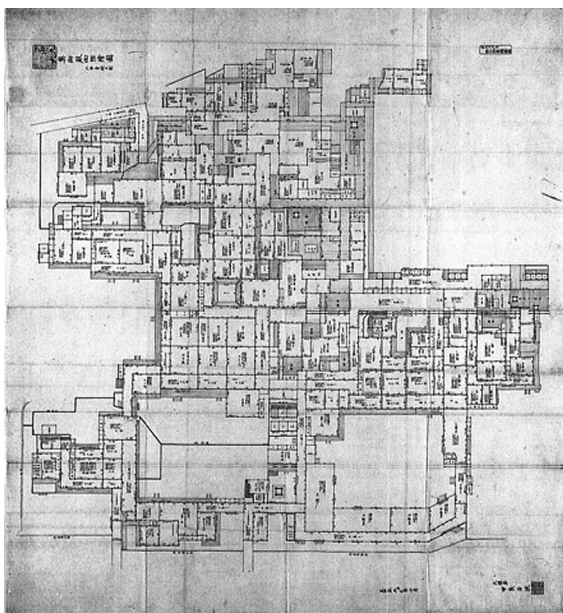


図1 『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』
(嘉永度平面 A) (東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵)

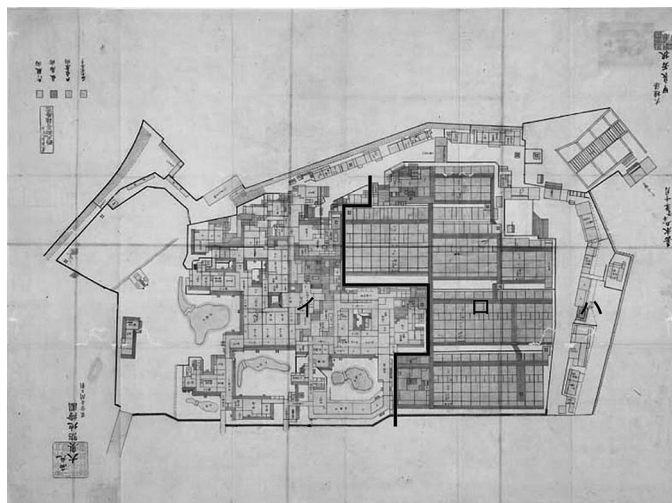


図2 『西丸大奥惣地絵図 二分一間之割』
(嘉永度平面 B) (東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵)

太線およびイロハは筆者が加筆

上棟式が行われている⁴。

嘉永度西丸御殿には、嘉永5年(1852)12月21日に12代家慶の世子家祥(後の13代家定)が移徙した⁵。家定には生涯にわたって3人の正室がいたが、嘉永5年(1852)時点では正室はいなかった⁶。

嘉永6(1853)年7月22日、12代家慶が亡くなると、家祥は13代家定として弘化元年竣工の弘化度本丸御殿へ移徙した⁷。安政3(1856)年12月18日、家定にとって三人目の正室にあたる薩摩藩島津家出身の篤姫と婚姻したが⁸、13代家定は安政5(1858)年8月8日に亡くなっている⁹。

安政6(1859)年10月17日、弘化度本丸御殿が焼失したため、本丸御殿から14代家茂、天璋院(前将軍家定の正室)、本寿院(家定の生母)らは西丸御殿へ移徙し¹⁰、万延元年(1860)11月9日に新しい本丸御殿が竣工するまで住んでいた¹¹。

嘉永度西丸御殿は、文久3年(1863)年6月3日に焼失した。

3 嘉永度西丸御殿大奥御殿向の平面

先述のように、嘉永度西丸御殿は基本的には世子の住宅であったが、一時的に幕府の政庁であり将軍一家の住宅となった。本丸御殿大奥は将軍・御台所・

将軍生母の儀式と生活空間がある御殿向・男性役人が勤務する広敷向・奥女中や側室が生活する長局向の3区域で構成されていたが、西丸御殿大奥も同様に、御殿向・広敷向・長局向で構成されている。御殿向は、『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』(図1 東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵)あるいは色分けして示された『西丸大奥惣地絵図 二分一間之割』(図2 東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵)の内のイ(黄色)の部分に示された範囲である。長局向は図2の内のロ(赤色)の部分に示された範囲、広敷向は同じく図2の内のハ(灰色)の部分に示された範囲である。

本研究で対象とした嘉永度西丸御殿大奥の平面図を表1に挙げる。これらの図面は、主に「新座敷溜」「松之間・三畳之間」「御座之間」「上御鈴廊下東側(笹之間)」「菊之間近くの用場」の平面の異同(表2)から2種類(それぞれ嘉永度平面Aと嘉永度平面Bと名づける)に分けることができる。

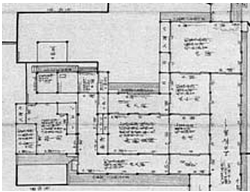
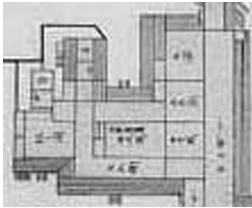
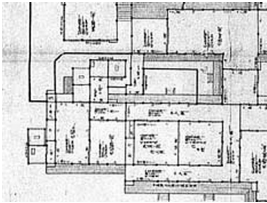

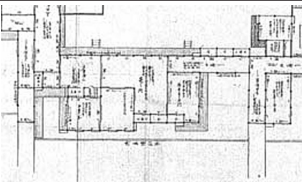
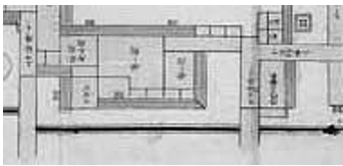
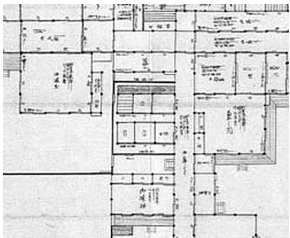

嘉永度平面Aは図1を示し、嘉永度平面Bは図2及び『御対面所上御膳所茶之間御神棚向絵図 七枚之内』・『御新座鋪絵図 七枚之内』・『御座之間絵図 七枚之内』(東京大学史料編纂所蔵〈島津家文書〉)の4枚を総称する。

表 1 研究対象とした平面図

史料名	所蔵先	年 記	分類
『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』	東京都立中央図書館	「大棟梁甲良若狭」 「嘉永五壬子年十月」	A
『西丸大奥惣地絵図 二分一間之割』	東京都立中央図書館	「嘉永五壬子年十月」	B
『御対面所上御膳所茶之間御神棚向絵図 七枚之内』	東京大学史料編纂所*	なし	
『御新座鋪絵図 七枚之内』			
『御座之間絵図 七枚之内』			

* このほかに、嘉永度西丸御殿大奥の平面図として次のものがある。大奥全体を示したものとして、『嘉永度西丸御殿大奥』。御殿毎の平面を示したものとして、『御広座鋪中御末御膳所老女衆詰所向絵図 七枚之内』・『大納戸御物置絵図 七枚之内』・『隅之部屋絵図』・『御錠口絵図 七枚之内』（東京大学史料編纂所蔵）。

表 2 嘉永度西丸御殿大奥御殿向平面の主な異同

部屋名	嘉永度平面 A 『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』	嘉永度平面 B 『西丸大奥惣地絵図 (二分一間の割)』
新座敷溜 松之間・三畳之間		
御座之間		
上御鈴廊下 東側(笹之間)		
菊之間近く の用場		

・新座敷溜

嘉永度平面 A では上御鈴廊下が溜にぶつかっているのに対して、嘉永度平面 B では上御鈴廊下が溜に食い込んでいる。

・松之間・三畳之間

嘉永度平面 A では松之間の西側に三畳之間と南側に簾縁塀があるのに対し、嘉永度平面 B では松之間のみである。

松之間北側の用場は、嘉永度平面 A では大用場 1 つ・小用場 1 つの 1 組あるのに対し、嘉永度平面 B では大用場・小用場の 2 組ある。

・御座之間

嘉永度平面 A では御座之間北側には湯殿はないが、嘉永度平面 B には湯殿がある。嘉永度平面 A では大用場・小用場が、嘉永度平面 B では物置になっている。なお、嘉永度平面 B の『御座之間絵図 七枚之内』には、上段のところに「西御殿」と書かれていて、この「西御」と「殿」の脇に「座之間」と書き加えられている。御座之間は西御殿とも呼ばれていたことが考えられる。

・上御鈴廊下東側（笹之間）

上御鈴廊下東側にある部屋が、嘉永度平面 A では上之間・次・錠口であるのに対し、嘉永度平面 B では御鈴番所・笹之間・拾畳之間にある。

・菊之間近くの用場

嘉永度平面 A では菊之間の南側にあるのに対して、嘉永度平面 B では菊之間前の廊下を挟んで西側にある。

嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の間に前後関係があるかどうかについては現状では明らかでない。嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の異同は、平面の異同、用場・湯殿の有無など、いずれも生活にかかわる部分であることから、設計から施工までの間、もしくは嘉永度西丸御殿が建っている間に主要御殿の主人が変わった可能性が考えられる。

4 嘉永度西丸御殿大奥主要御殿の室内意匠の構成

表 1 のうち、室内意匠が明らかになる図面は、嘉永度平面 A の『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』（図 1 東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵）と、嘉永度平面 B と総称した 4 図面の内 3 図面『御対面所上御膳所茶之間御神棚向絵図 七枚之内』・『御新座鋪絵図 七枚之内』・『御座之間絵図 七枚之内』（東京大学史料編纂所蔵〈島津家文書〉）である。これら 3 図面のほかに『御広座鋪中御末御膳所老女衆詰所向絵図 七枚之内』・『大納戸御物置絵図 七枚之内』・『隅之部屋絵図』・『御錠口絵図 七枚之内』（東京大学

史料編纂所蔵〈島津家文書〉）の 4 図面が存在する。（以下、これら 7 平面図を総称して「島津家 7 図面」と呼ぶ。）「島津家 7 図面」には年記がないが、「嘉永五壬子年十月」「嘉永五壬子年西丸御普請絵図」と年記のある嘉永度平面 B の一つである『西丸大奥惣地絵図 二分一間之割』（東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵）の平面と酷似している。

嘉永度平面 A の『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』（東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵）には、各部屋の壁面・天井の仕様と仕上げ（障壁画と唐紙の使い分け）が書き込まれている。これをもとに壁面・天井の仕様を整理したのが図 3 である。

「島津家 7 図面」のうち、主要御殿の室内意匠が明らかな図面は、表 1 に挙げた『御対面所上御膳所茶之間御神棚向絵図 七枚之内』・『御新座鋪絵図 七枚之内』・『御座之間絵図 七枚之内』の 3 枚である。

そこで、嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の主要御殿「対面所」、「新座敷」、「御座之間」の障壁画と唐紙の使い分け方を検討したのが表 3 である。

嘉永度平面 A・嘉永度平面 B の図面における障壁画と唐紙の使い分け方の吟味に際し、次のように判断した。

壁面における障壁画と唐紙の使い分け方をみると、障壁画の場合は「張付」で「絵」と書かれている。唐紙の仕様は「張付」で唐紙の種類が書き込まれている。ただし、壁面の仕様が「張付」となっている場合でも唐紙の種類が書き込まれていない場合もある。万延度本丸御殿大奥の場合、「絵」を用いる部分は最も格の高い部屋または入側であること、1 図面内で「絵」だけが特記されていることから、「絵」と特記されていない場合は唐紙であると判断する。

天井における障壁画と唐紙の使い分け方をみると、障壁画の場合は「格天井」の「格間」に「絵」と書かれている。唐紙の場合は、「鏡天井」に唐紙の種類が書き込まれている。ただし、「鏡天井」とあっても唐紙の種類が書き込まれていない場合もある。壁面と同様、万延度本丸御殿大奥の場合、「絵」を用いる部分は最も格の高い部屋であり、1 図面内で「絵」だけが特記されていることから、「絵」と特記されていない場合は唐紙であると判断する。

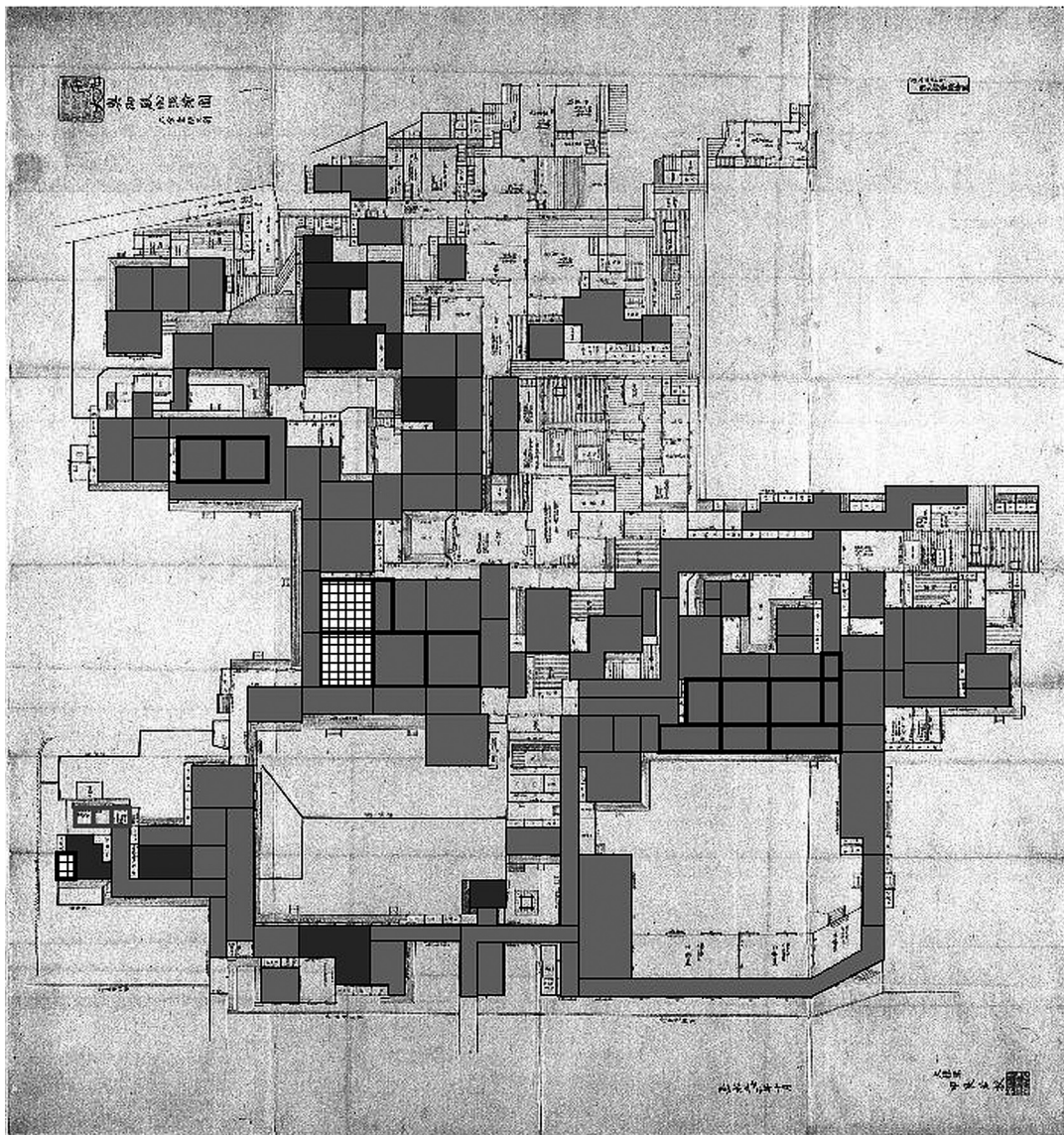


図3 嘉永度平面 A の図面において唐紙の使用が判明する御殿

『西丸大奥御殿向惣絵図 六分一間之割』（東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵）に障壁画と唐紙の使い分け方の形式をプロットした

凡例 ■：絵/絵（格天井）型

■：唐紙/唐紙（鏡天井）型 唐紙の種類不明

■：天井のみ唐紙を用いていることが分かる部分

■：絵/唐紙（鏡天井）型

■：唐紙/唐紙（鏡天井）型 唐紙の種類が明らかな部分

■：壁面のみに唐紙を用いていることが分かる部分

対面所

床・違棚・調台のついた上段・下段・二之間・三之間・梅之間上之間（嘉永度 B では梅之間）・梅之間次（嘉永度平面 B では「鷺之間」とこれらを囲う西・南・北入側と東廊下（嘉永度平面 B では「東入側」と「東廊下」に分かれる）からなる。

・嘉永度平面 A の場合

室内意匠の構成は、上段・下段が〔絵/絵（格天

井）型、調台・二之間・三之間・南入側が〔絵/唐紙（鏡天井）〕型、梅之間上之間・梅之間次・西入側と東廊下が〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕型である。

このうち唐紙の種類が明らかになるのは、二之間・三之間の天井の「金雲砂子」である。

・嘉永度平面 B 『御対面所上御膳所茶之間御神棚向絵図 七枚之内』の場合

室内意匠の構成は、上段・下段が〔絵/絵（格天

井)型、調台・鷺之間・二之間・三之間・東入側・西入側(中・南)・南入側が〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、梅之間・西(北)・北入側と東廊下が〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。

このうち、唐紙の種類が明らかになるのは、調台天井の「上金村砂子」、梅之間壁面の「柿菊石畳」・天井の「紺青鳳凰丸」、鷺之間天井の「紺青鳳凰丸」、東廊下・西入側(北)壁面の「浅黄地金きら梅ちらし」、東・西(中・西)・南入側天井の「上金村砂子」、東廊下・北入側壁面の「浅黄地金きら梅ちらし」・天井の「上金村砂子菊」の文様である。

・嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の室内意匠の異同

嘉永度平面 A の梅之間次(嘉永度平面 B では鷺之間)は、嘉永度平面 A が〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型であるのに対し嘉永度平面 B は〔絵/唐紙(鏡天井)〕型である。嘉永度平面 A の東廊下(北)と嘉永度平面 B の東入側は同位置にあるが、嘉永度平面 A が〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型であるのに対し、嘉永度平面 B は〔絵/唐紙(鏡天井)〕型である。

新座敷

新座敷は、床と違棚のついた上段・次(嘉永度平面 B では下段)・三之間・溜(嘉永度平面 B では2つあり、一方は二畳)・松之間・三畳之間(嘉永度平面 B では三畳之間はない)とこれらを囲う入側、中奥と大奥をつなぐ上御鈴廊下・大用場(嘉永度平面 B では2つ)・小用場(嘉永度平面 B では2つ)からなる。

・嘉永度平面 A の場合

室内意匠の構成は、三畳之間が〔絵/絵(格天井)〕型、上段・次・三之間・溜・松之間・入側・上御鈴廊下・大用場は〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。

このうち、唐紙の種類が明らかになるのは、上段と松之間である。上段壁面の「地紋紗綾形金紺青霞竹菱亀之丸」・天井の「地紋紗綾形金紺青霞竹菱亀之丸」、松之間壁面の「紺青紗綾形若松」・天井の「地紋□□紺青御雲桜」である。

・嘉永度平面 B 『御新座鋪絵図 七枚之内』の場合

室内意匠の構成は、上段・下段・三之間・溜・入側が〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、松之間・上御鈴廊下・小用場・二畳が〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。

このうち、唐紙の種類が明らかになるのは、上段・下段の天井の「金雲砂子」、三之間・溜天井の「上金村砂子」、松之間壁面の「金砂子紺青若松」・天井の「金下村砂子」、上御鈴廊下壁面の「金紺青菊石畳」・天井の「紺青紗綾形菱」、これらを囲う入側天井の「紺青紗綾形菱」、小用場・二畳天井の「小紋形鳥の子紙」・壁面の「紺青□桜」である。

・嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の室内意匠の異同

上段・次(嘉永度 B では下段)・三之間・溜・入側は、嘉永度平面 A では〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型であるのに対し、嘉永度平面 B では〔絵/唐紙(鏡天井)〕型である。

御座之間

床と違棚のついた上段・次(嘉永度平面 B では下段)と入側、化粧之間、納戸、溜(嘉永度平面 B では2つ)、小用場2つ(嘉永度 B では1つ)、大用場3つ(嘉永度 B では2つ)、椽座敷、(嘉永度平面 B には茶所が加わる)廊下からなる。

・嘉永度平面 A の場合

室内意匠の構成は、上段・次が〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、入側・化粧之間・納戸・椽座敷・廊下・溜が〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。用場の室内意匠については記述がない。唐紙の種類が明らかな部屋はない。

・嘉永度平面 B 『御座之間絵図 七枚之内』の場合

室内意匠の構成をみると、上段・下段¹²・化粧之間・納戸・溜・入側・椽座敷・廊下・茶所・小用場は〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。

このうち、唐紙の種類が明らかになるのは、上段・下段天井の「金砂子」、入側・化粧之間・納戸・椽座敷壁面の「金紺青梅竹丸」・天井の「金紺青松扇」、廊下・茶所壁面の「柿藍蠟唐草」・天井の「浅黄地唐草」、小用場・溜(西)・大用場(西)壁面の「紺青枝菊」・天井の「浅黄地唐草」である。

・嘉永度平面 A と嘉永度平面 B の室内意匠の異同

室内意匠の構成の相違は上段・次(嘉永度 B では下段)で、嘉永度平面 A が〔絵/唐紙(鏡天井)〕型であるのに対して、嘉永度平面 B は〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型である。

表 3 嘉永度西丸御殿大奥主要御殿にみる障壁画と唐紙の使い分け方

		嘉永度平面 A					
		部屋名	形式	壁面		天井	
				仕様	仕上げ	仕様	仕上げ
対 面 所	上段	〔絵/絵（格天井）〕 型	「張付」	「絵」	「格天井」	「絵」	
	下段						
	調台	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型			「鏡天井」	「金雲砂子」	
	二之間						
	三之間						
	梅之間上之間	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型					
	梅之間次						
	東廊下（北）						
	東廊下（南）						
	西入側（北）						
	西入側（中）						
	西入側（南）						
	南入側	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型		「絵」			
	北入側						
新 座 敷	上段	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」	「地紋紗綾形 金紺青霞竹菱亀之丸」	「張付」	「地紋紗綾形 金紺青霞竹菱亀之丸」	
	次						
	三之間						
	溜						
	松之間			「紺青紗綾形若松」		「地紋□□紺青御雲桜」	
	三畳之間	〔絵/絵（格天井）〕 型		「絵」	「格天井」	「絵」	
	入側	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型			「張付」		
	上御鈴廊下						
	小用場						
	溜	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」		「張付」		
	大用場						
	御 座 之 間	上段	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」	「絵」	「鏡天井」	
次							
入側		〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型					
化粧之間							
納戸							
—		—	—	—	—	—	
椽座敷		〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」		「鏡天井」		
廊下							
—		—	—	—	—	—	
小用場							
溜		〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」		「鏡天井」		
大用場（西）							
大用場（東）							
小用場（納戸脇）							
大用場（納戸脇）							

凡例 「 」: 史料上の記述, 太字: 唐紙の種類, ■: 嘉永度 A と嘉永度 B とで異同がみられる平面・部屋名称, —: 嘉永度 A にあって

嘉永度平面 B					
部屋名	形式	壁面		天井	
		仕様	仕上げ	仕様	仕上げ
上段	〔絵/絵（格天井）〕 型	「張付」	「絵」	「格天井」	
下段					
調台	「鏡天井」			「上金村砂子」	
二之間					
三之間					
梅之間	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型		「柿菊石畳」	「紺青鳳凰丸」	
鷺之間	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型		「絵」	「上金村砂子」	
東入側					
東廊下	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型		「浅黄地金きら梅ちらし」	(朱)「上金村砂子」 「紺青松皮菱」	
西入側（北）			「絵」	「上金村砂子」	
西入側（中）	「浅黄地金きら梅ちらし」				「上金村砂子菊」
西入側（南）					
南入側					
北入側	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型				
上段	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」	「絵」	「鏡天井」	「金雲砂子」
下段					「上金村砂子」
三之間					
溜			「金砂子紺青若松」	「金下村砂子」	
松之間	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型				
—	—	—	—	—	—
入側	〔絵/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」	「絵」	「鏡天井」	「紺青紗綾形菱」
上御鈴廊下	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型		「金紺青菊石畳」		「紺青紗綾形」
小用場（2 か所）			「紺青□桜」	「天井」	「小紋形鳥の子紙」
二畳					
大用場（2 か所）					
上段	〔唐紙/唐紙（鏡天井）〕 型	「張付」		「鏡天井」	「金砂子」
下段					
入側			「金紺青梅竹丸」		「金紺青桧扇」
化粧之間					
納戸					
溜（東）			「金紺青梅竹丸」		「金紺青桧扇」
椽座敷					
廊下			「柿藍蠟唐草」		「浅黄地唐草」
茶所			「紺青枝菊」		
小用場					
溜（西）					
大用場（西）					
大用場（東）		「羽目」		「板天井」	
—					
—					

嘉永度 B にはない部屋（または、嘉永度 B にあって嘉永度 A にはない部屋）， 空欄：史料上に記述のないもの

5 まとめ

本稿では、嘉永度西丸御殿大奥主要御殿を研究対象とし、次の2点について明らかにした。

まず、嘉永度西丸御殿大奥主要御殿の壁面・建具・天井に用いられた障壁画と唐紙の使い分け方を明らかにした結果、障壁画と唐紙の使い分け方には、[絵/絵（格天井）]型、[絵/唐紙（鏡天井）]型、[唐紙/唐紙（鏡天井）]型の3形式がある。主要御殿内の部屋の用途や使用者の格に合わせ、これら3形式を組み合わせている。

次に、嘉永度西丸御殿大奥の2種類の平面を比較した結果、生活に密接に関係する用場に変更が多くみられること、部屋名称に相違がみられることから、2種類の平面は、それぞれ異なる主人が用いていたことが考えられる。

2種類の平面を比較すると、平面の異同や部屋名の名称に変更がみられる場合は障壁画と唐紙の使い分け方や唐紙の種類が異なる。このことから、唐紙の種類に、主人の好みが反映されていることを推測することができる。

また、嘉永度西丸御殿大奥と、これまで明らかにしてきた万延度本丸御殿大奥とを比較すると、障壁画と唐紙の使い分け方の3形式と3形式の組み合わせ方は酷似している。しかし、嘉永度西丸御殿と万延度本丸御殿とで同じ機能をもつ御殿を比較すると、[絵/唐紙（鏡天井）]型、[唐紙/唐紙（鏡天井）]型の場合、用いられている唐紙の種類は異なり砂子が多用されている。

封建秩序に則り旧規を重んじる江戸城の場合、再建の際には、「有形の通り」に再建するのが常であったが、嘉永度西丸御殿再建にあたっては有形を省略し手軽に再建するようにとの幕府の方針があった¹³。張付については「総金之处、砂子」、天井については「板天井にて可相済分は格天井に不及」とされている¹³。嘉永度西丸御殿で砂子が多用されているのはそのためであろう。

註

1 拙稿「『御本丸壺之御殿向絵図』について」日本建

築学会大会梗概集 2006. 9, 「江戸城西の丸仮御殿中奥の唐紙について」同上 2007. 9, 「幕末期江戸城本丸御殿大奥対面所の室内意匠」『学苑 2月号 人間社会学部紀要』昭和女子大学紀要 No. 808, 2008. 2, 「幕末期江戸城本丸御殿大奥御小座敷の室内意匠」『学苑 3月号』同上 No. 809, 2008. 3, 「幕末期江戸城本丸御殿大奥御座間の室内意匠」『学苑 8月号』同上 No. 814, 2008. 8, 「幕末期における江戸城本丸御殿大奥松御殿の室内意匠について」日本建築学会大会梗概集 2008. 9, 「幕末期江戸城本丸御殿大奥新御殿の室内意匠」『学苑 10月号』昭和女子大学紀要 No. 816, 2008. 10, 「万延度本丸御殿大奥における室内意匠の構成」『学苑 2月号 人間社会学部紀要』同上 No. 820 2009. 2, 「万延度江戸城本丸御殿大奥に用いられた唐紙の色について」日本建築学会大会梗概集 2009. 9, 「万延度江戸城本丸御殿大奥主要御殿に用いられた唐紙について」『学苑 10月号』昭和女子大学紀要 No. 828, 2009. 10, 「嘉永度江戸城西丸御殿大奥主要御殿における室内意匠の構成について」日本建築学会大会梗概集 2010. 9

- 2 嘉永度西丸御殿は、文久3年（1863）6月に焼失した。その後、再建計画が立てられている最中に本丸御殿が焼失したことにより、西丸御殿は本丸御殿の仮御殿として再建されることになった。この西丸御殿は、元治元年（1864）に消失している。
- 3 伊東龍一「西丸御殿の構造と機能」『江戸城 四海をしろしめす天下の府城〔歴史群像〕名城シリーズ』学研, p. 106
- 4 『東京市史稿 皇城篇 第三』昭和49年2月15日
- 5 嘉永5年12月21日『愼徳院御實紀卷16』
- 6 1人目の有姫（法号：天親院）は天保12年（1841）に婚嫁、嘉永元年（1848）に亡くなっている。2人目の寿明姫（法号：澄心院）は嘉永2年（1849）に婚嫁、嘉永3年（1850）に亡くなっている。3人目の篤姫（法号：天璋院）は安政3年（1856）に婚嫁している。
- 7 嘉永6年10月21日『溫恭院殿御實紀』
- 8 安政3年12月18日『溫恭院殿御實紀』
- 9 安政5年8月8日『溫恭院殿御實紀』
- 10 安政6年10月17日『昭徳院殿御實紀』
- 11 万延元年11月9日『昭徳院殿御實紀』
- 12 拙稿「嘉永度江戸城西丸御殿大奥主要御殿における室内意匠の構成について」日本建築学会大会梗概集 2010. 9では、障壁画の可能性を指摘している。
- 13 『加川勝敏筆記』『東京市史稿 皇城篇 第三』昭和49年2月15日